



平成29年12月8日発行

## 第 105 号

事務局 〒169-0051 東京都新宿区  
西早稲田2-18-23スカイエスタ507  
TEL/FAX 03-6457-3921  
E-mail n.s.e.g@d7.dion.ne.jp  
http://www.seishineisei.gr.jp/



### 〈目 次〉

日本精神衛生学会 第33回大会を終えて……………1
大会印象記……………2
第33回大会に参加して……………4

## 日本精神衛生学会 第 33 回大会を終えて

日本精神衛生学会第33回大会長:加藤 純(ルーテル学院大学)

2017年10月7日と8日の2日間に亘り、ルーテル学院大学(東京都三鷹市)を会場に、日本精神衛生学会第33回大会を開催しました。

大会テーマは「実践と研究の良い循環を目指して」としました。実践と研究のつながりを大切にしている日本精神衛生学会の魅力を感じられるように、シンポジウムや講演、ワークショップ、演題発表を織り交ぜたプログラムを組みました。参加者の関心によって、研究の色合いが強いプログラムに参加もできるし、実践的な色合いが強いプログラムに参加することもできるように、同時時間帯に、できるだけ2つの企画を用意しました。

初日の午前中は、大会長講演に続き、「実践と研究の良い循環を目指して:私たちにできること」と題する大会シンポジウムがありました。副大会長も務めた菅野恵氏がコーディネーターとなり、現場での実践の成果を研究として発表している太田幸治氏と森田麻登氏から報告があり、指定討論者の元永拓郎氏が加わって、活発な討論が行われました。

初日の午後は、高塚雄介氏による講演「若者の社会的孤立」と小泉典章氏による講演「被災者・被害者の支援から学ぶ」がありました。いずれも長年の研究と支援活動を踏まえた情報量の多い講演でした。同時時間帯に別会場でポスター発表がありました。また、ひきこもりフューチャーセッション「庵-IORI」のファシリテーターによるワークショップを開催しました。

2日目の午前中は、消防庁の芥田真樹氏による「MCRT 活動のこれまでとこれから」と題する講演と、ポスター発表、口頭発表がありました。午後は、学会誌企画シンポジウム「実践と研究の対話:学会誌と論文掲載の意義」が開催されました。学会誌編集委員長・影山隆之氏が企画・司会を担当し、学会誌に論文が掲載された中西三春氏、草海由香里氏、山田愛子氏が、論文の執筆から掲載までの経験について発表しました。同時時間帯に、ワークショップ「人との出会いの中で何によってお互いが変わるのか」が開催されました。鉦鹿健吉氏の発題を受けて、富田富士也氏、ジェームズ・サック氏、伊藤ひろ子氏が対話を展開し、さらに、福島眞澄氏の司会進行により参加者が対話に加わるというユニークな企画でした。

企画の数は絞って一つ一つの時間を長く取りました。登壇者の皆様のお力によって、じっくりと内容を深めることができました。また、皆様の積極的な参加により、発表者と参加者の間で活発な討議ができたことを感謝しております。

大会に続き、10月9日(月・祝日)には3つのポストワークショップを開催しました。福山和女氏による「ソーシャルワーク・スーパービジョン」、衣斐哲臣氏による「児童福祉領域における家族支援」、荒川歩氏による「複線径路・等至性アプローチ:実践とつながる質的研究の可能性」の3つです。研究と実践をつなぐ方法を体験的に学べるワークショップになりました。

演題発表は、ポスター発表13題、口頭発表3題の合計16題でした。演題募集から締め切りまで短い日数でしたが、積極的に応募して、発表を準備して下さった皆様に深く感謝申し上げます。

2日間の大会には学会員62名、非学会員55名、大学院生13名、合計130名が参加、ポストワークショップには48名が参加してくださいました。

活発な参加と対話によって満足度の高い大会になって欲しいと願っていました。皆様のお力により、満足して頂いた企画もあったと思いますが、参加者が少なくなってしまった企画もありました。もっと多くの方に参加して頂けるようなご案内・お声掛けが必要だったと思います。反省すべき点も多く、ご迷惑をお掛けした皆様にお詫び申し上げます。心許ない大会長を支えて隅々まで心配りをして運営に携わって下さった大会役員と学会事務局の皆様に感謝申し上げます。大会を応援し盛り上げて下さった早川東作理事長はじめ理事の皆様、何よりも参加者お一人お一人に感謝申し上げます。

次年度、東京都町田市で開催される第34回大会の成功を祈念しております。

## 大会印象記

竹岸 智子(佐賀大学大学院(博士課程)/鹿島藤津地区医師会立看護高等専修学校)

暑い夏が終わり、街路樹の葉も日を追って色付き始めたよい時期に、日本精神衛生学会第33回大会が東京ルーテル学院大学にて開催されました。今年度の大会テーマは「実践と研究の良い循環を目指して」ということで、本来切り離して考えてはならない実践と研究ではありますが、学会等で発表された研究内容を実践の中でどのように生かすのか、それは中々容易ではない現実もあります。そう感じ日々の学校現場で勤務している私にとってこの学会テーマはとても興味深いものでありました。今回、大会1日目・2日目に参加させて頂きましたのでご報告させて頂きます。

大会1日目、ルーテル学院大学のチャペルのとても厳かな雰囲気の中で、今大会長である加藤純先生より今回の学会テーマである「実践と研究の良い循環を目指して ～対話と参加～」という演題のもとで講演がありました。加藤先生のお話を聞く中で、私の中で2つ印象深く残ったことがありました。1つは、「実践で出会う課題と学んできた知識や技術とをどう結び付けるか考える」ということでした。私の中で、「考える」という言葉がとても大切なキーワードのように感じました。目の前に、何か課題が出てきた時、一度立ち止まって何か過去に関わった事例の中に今回の課題と共通していることはないか、対象者は違っていても、何か今回の課題解決に結びつくことはないか考えること。それが、実践の中で得られた研究結果を再び実践の中で生かしていくことになるのだということを学ぶことができました。実践こそ研究の根底になるのだと強く感じる発表でした。そしてもう1つ印象に残ったことは、加藤先生が最後に「学会を楽しんでください」という言葉でした。

私は初めてこの精神衛生学会という学会に参加しましたが、学会というものは、とにかく多くのことを学び、持ち帰ることこそ全てだと思っていました。ですので、この言葉を聞いた時正直学会が楽しいと思えることはまずないだろうと感じていました。しかし、学会が終わった今感想を一言で云うならば「楽しかった」という言葉しか出てきません。そう思わせてもらったのはきっと「人間らしさ」なのではないかと感じています。人の心に寄り添う職種の方々のお話は、とても人間らしさを感じられ、人を引き付けるものがありました。きれいごとばかりではないのが人間であり、そういう部分を含めて対象の心に寄り添う。そういったお話が聞けたのはとても楽しい充実した時間でした。



午後からは、高塚先生の「若者の社会的孤立～ひきこもりと自殺に走る若者たち～」の講演を聞かせて頂きました。高塚先生のお話の中で若者たちに見られる願望として自分のことを分かってほしいという自己肯定感が強いのに対し、自分を分ってもらえないという現実に対し自分自身を認めることができないという自己否定感という矛盾した気持ちをもって生きているということを知り、矛盾する気持ちの中で消化できない思いが様々な問題を引き起こす要因になっているということが分かりました。いじめやひきこもり、自殺など一見全く違う問題行動に見えるものも、歪んだ攻撃性がどこに向けて行われているかの違いに過ぎないということを高塚先生のお話の中で知ることができました。実際私は、問題行動(状態)に対してのみ対応を行っており、その奥に抱える若者の心の葛藤に目を向けていなかったことに気づき、自分の言動に深く反省しました。歪んだ攻撃の裏側にある心の問題に寄り添うことが何より必要なことだと強く感じました。また、若者の「自立」が心理的な負荷となっていること。そのことがひきこもりの要因になっていることを教えて頂いたとき、自分の関わる中にも、常に指導者に答えを求め、自分で考え行動することへ強い拒否感を示す学生がいたこと



ことを思い出し、自立の前に自律ができていのかどうかをきちんと見極めて関わるのがまず大切なのだと感じ、今後の教育の中で実践していきたいと感じました。高塚先生のお話を聞いていて状態の背景にあるものを見極めて関わることの重要性を知り、支援者側のスキル向上が前提であると感じ、私自身、知識と技術の向上に一層の努力をしていかなければならないと感じる素晴らしい講演でした。

大会2日目には、「人の出会いの中で何によってお互いがかかわるか」というワークショップに参加させて頂きました。対話者の富田先生、伊藤先生、ジェームズ先生と発題者の鉅鹿先生の意見交換は本当に人間味あふれるワークショップでした。4人の先生がいるということは4通りの考えがあるということが一番嬉しく感じました。昔から十人十色といいますが、対象となるのも人であり、支援者も人である。そこには何通りもの考え方や支援の方法があって、それでいいんだと実感した内容でした。その中で特に私の中に残った言葉は、伊藤先生の「あなたは私にはなれない。私はあなたにはなれない。」という言葉でした。よく「あなたの気持ち

わかる」という言葉や「あなたの立場になったら」などの言葉を口に出してしまうことがあります。しかし、実際本当に相手と私は違うということから始めていいと分かりました。違いをはっきりさせることは、相手の気持ちに寄り添えないのではないかと私が不安になり避けていたのだと分かりました。伊藤先生が言われたように違う人間だけど、分かりあいたい、何か力になりたい、そういったことを伝えていくことが大切なのだと気付くことができました。また、ジェームズ先生は、「相手にたいしてかけがえのない存在であることを伝えている」と話されました。かけがえのない存在であること、その言葉こそ、高塚先生が言われていた自己肯定感を感じたいという若者に必要な魔法の言葉なのかもしれません。私もそういった言葉をかけてあげられるように関わっていきたくと切に感じました。

今回、初めて学会に参加し、他職種の方々の様々な講演を聞かせて頂くことで、「心の健康」とは何かを真剣に考える時間となりました。また、昼食時間や懇親会では、先生方が気さくに話しかけて下さり、皆さんの温かさに触れることができ、大変嬉しく感じました。私は2日間の参加でしたが、沢山の刺激を受けると共に、次年度の学会では自分自身スキルアップして皆さんに会えるよう、実践と研究に励んでいきたいと考えています。

最後になりましたが、大会長の加藤純先生、実行委員の皆様、そして私にこのような機会を下さいました影山先生に心より御礼申し上げます。

## 第 33 回大会に参加して

丸山 千里 (和光大学現代人間学部4年)

今回私は、日本精神衛生学会のボランティアスタッフとして2日間参加しました。開催校の学生というわけではなく、他大学生のスタッフ参加ということもあり、また初めての学会ということもあり緊張していました。しかし、大会長をはじめ、大会スタッフの方々にとても良くしていただき、またワークショップにも参加することができ、実のある時間を過ごすことができました。

1日目に参加させていただいたワークショップ「つながりと安心感を作るファシリテーション」(コーディネーター:池上正樹先生)では、ひきこもりについて講演を聴くことができました。私自身、ボランティアで不登校の子どもたちと関わる経験があり、ひきこもりについても興味がありました。内容としましては、「庵(IORI)」というひきこもり支援団体のことでした。初めは「ひきこもりの人たちが集まって対話をする場所」という印象から、「居場所づくり」に特化した団体なのかと思っていました。しかし、庵(IORI)は「居場所」ではなく「通過点」とであると説明されていました。私たちから何か手厚く迎え入れることで安心した場所を提供するのではなく、彼ら(当事者たち)が生き生きと輝くために安心できる場所を提供していることを知りました。私がこれまでイメージしていたことと異なり驚きましたが、とても新鮮でした。

このワークショップでお話されていた中で、私の心を打った言葉がありました。それは「生きているだけでいいじゃない」というものでした。「外に出る・就労する」という当たり前のことができる人とできない人がいて、当たり前のことができないからダメといわれてしまうことが多い現代に「生きているだけでいいじゃない」という言葉は魔法の言葉だなと感じました。私にも気持ちが下がってどうにもできないとき、ふと死んだら楽になれるかもしれないと思ってしまうこともあります。そんなときにこの言葉が私を少し前向きにしてくれるのではないかと思います。このような何気ない言葉で「自分を卑下しないでいいんだ」と思わせてくれる方々が関わっているからこそできる支援なのかなと思いました。

3日目のワークショップ「児童福祉領域における家族支援」(講師:井斐哲臣先生)では、児童福祉領域での支援と解決的思考について参加させていただきました。1日目に参加した際のディスカッションとは少し違い、ロールプレイをしながら実践的に解決的思考を学ぶことができました。私自身、普段からどちらかというと問題的思考で考えていたんだと身をもって気づくことができ、それと同時に解決的思考になるにはなかなか難しいなと感じました。

対話が大事というお話の中で、「その人が持っているリソース(資源・力)に焦点を合わせ引き出し、肯定的に共有する」ということをお話されていました。私が過去に受けた他の講演会で「相手へのチャンネル合わせ」は相手が自分に心を開いて話してくれるきっかけとなるため大事だと聞いたことがあります。その話が心に残っており、今回学んだこととリンクして考えることができました。このように私なりに乏しい想像力ですが、解決的思考にするためにどうすればよいのかイメージしながらワークショップに参加することで、考えをより深めることができましたと思います。

二日間を通して、大学では交流することができない方々と対話できたことは私にとってとても大きな経験でした。私は普段自分の意見が凝り固まらないように柔軟に受け止めることを心掛けていますが、やはり大学の学生との対話だけでは偏っていたと感じました。福祉関係や心理職といったさまざまな職種の方たちと話せることは、とても新鮮で勉強になりましたし、大変充実した時間でした。こうして拙い文ですが書かせていただけて光栄です。ありがとうございました。

